

こごとが聞きたい

して七カ月間、ロシア連邦

わゆる発展途上国を一人旅

た後も、その気持ちは消え

——やりたかったからや

経験そのものが「報酬」

の病院で応援をしたことも
あります。AMD Aも国連
もほとんど無報酬ですが、
潜在中の生活費は保証され
ています。ほくには、それ
で十分です」

「日本で脳外科医になっ
た後、その気持ちは消え

もつぶしがきょうようにと外
科に移り、そこで二年間の
経験を積んでからAMD A
に入った。住みたいところ
に住み、人の役に立ちたい
ことができればラッキー
だな、という気持ちでし
た」

若者や退職後の中高年を
中心に、国内外でボランティア
を増やしている人が増えてい
る。社会的な評価が高まる
一方、首相の私的諮問機関
「教育改革国民会議」は昨
年末に学校などでの義務化
を提言し、法制化される可
能性も出てきた。ボランティア
が増えて、いったい何だろ
う。焼津市出身の医師で、
海外で災害や紛争の救援活
動を続けてきた塚本勝之さ
んに、体験を通じた実感を
聞いた。

「聞き手・和田 昌子」

——これまでにどんな活
動をしてきたか、教えてく
ださい。

「主に岡山県に本部があ
るアジア医師連絡協議会
(AMD A) に所属し、一
九九七年からインドネシ
ア、イラン、ザンビアなど
九カ所のプロジェクトに参
加してきた。内容は緊急的
な医療から、病院の設立、
地域全体の保健・飢餓の改
善プロジェクトまでさまざ
まです」

「このほか、国連に所属

ボランティアってなに?

救援活動続ける医師 塚本勝之さん



1999年11月、ザンビアを訪れ、現地のスタッフと話をした塚本勝之さん／写真提供・塚本さん

つかもと かつゆき 1967年、焼津市生まれ。藤枝東高校、浜松医科大学を卒業後、浜松市や東京都の病院に5年間勤務。97年3月から2年間、AMD Aに所属して海外の9地域で災害や紛争の救援活動をした。AMD Aは岡山市に本部を置き、世界27カ国に支部を持つ非政府組織(NGO)。現在は沼津市の病院に勤務している。33歳。

「自分の中でも戸惑いがあったのですか。」
「たぶんありません。たとえば一九九七年には、内戦で追われたソマリア難民のいるツブチのキャンプに行ったのですが、薬や生活物資の手配やツブチ政府との折衝など、ほくらのやることは医療以外の仕事のほうが多かった。やっと医